

第6回

日本構造医学会 釧路学術大会特集

2001年9月15日～16日 釧路生涯学習センター「まなぼっと」

日本構造医学会の第6回釧路学術大会（大会実行委員長・葛巻仁氏）が、9月15・16日の2日間にわたり、釧路市を代表する幣舞橋にほど近い釧路生涯学習センター「まなぼっと」において開催された。学会員の参加者は102人。

大会では、吉田勸持会長による基調講演のほか、住岡輝明氏による教育講演、9題の一般演題発表が行われた。1階の展示会場では、新医療技術開発機構の頭部冷却装置、スペース・ゲットウェルなどの関連機器や商品、書籍などが展示され、吉田会長による講演のビデオ上映も行われた。

また、会員以外の参加も呼びかけ、釧路市の一般市民や教育関係者、患者やその家族など、約70人の一般参加者が吉田会長の基調講演に耳を傾けた。

初日、葛巻実行委員長はあいさつで、「21世紀を迎え、新生第1回の学術大会にふさわしく、演者が発表するにとどまらず、一般の参加者も含め全員が意見をもち合える学会にできるように準備をしてきた」「日本構造医学会憲章にもあるように、医療現場の真実の



基調講演を行う吉田会長

声を反映させるべく、会員は患者やその家族と同じ視線に立って取り組んでいる。今回参加された一般の方々も、この学会に参加したことを通して、ご自身やお知り合いの健康に役立ててほしい」と述べた。

つづいて、吉田会長があいさつを行い、「20世紀の科学では、還元論のもと専門分野の細分化が行われ、専門家同士でさえ共通言語をもたなくなってきた。さらに医療現場でも、患者と医療者が共通言語をもたないために意思の疎通ができない状況にある。しかし、専門家間の意見を集約し、また一般の方たちも医療を批判するだけでなく、医療者とともに自己責任をもち、患者が自立できるような医療をめざすために、こうした一般市民が参



吉田会長の基調講演に聴き入る参加者



円卓形式で行われた学会の様相

加できる学会を通じて、専門家と市民が共通言語をもって意見をもち合える環境にしていきたい」と、一般の参加者にも向けて構造医学の方向性について述べた。

また、今大会を終えて、学術大会事務局（担当・木原弘隆氏）には、吉田会長の基調講演を聴いた釧路市民から多くの感想が寄せられている。そのほとんどが「もっと聴きたかったが時間が足りなかった」「むずかしいことを話されているものと思うが、一般の人にもとてもわかりやすく話していただいた」「日本語をととてもきちんと使う先生で、話に引き込まれる感じがした」といったものだという。これに対し、「一般の人たちが自分の身体についての知識を、本からではなく自分自身の身体で理解できる医療の在り方を実現するためにも、今回のような市民講演は大切

だと思う」（木原氏）との手応えを得ている。

こうした市民からの反応も含め、医療者と患者が双方向性をもった医療の実現をめざす、新生日本構造医学会の礎となる学術大会の開催となったのではないだろうか。

なお、次回第7回学術大会は、来年11月16日（土）、名古屋市の名古屋国際会議場レセプションホールで開催される予定。

第6回釧路学術大会の一般演題は以下のとおり。

▽東大ボート部におけるL-Pit頻発に見る競技特性と大脳の関連についてⅡ（山本真永）
 ▽ヒトの動態安定性に基づく椅子の考案～鉛直座位姿勢による生理重力線獲得に向けて～（根橋豊光）
 ▽私の歯科治療と構造医学（久保田正紀）
 ▽針の穴から天井を覗く～針の穴もいっぱいあればいろいろ見えてくる～（熊谷光剛）
 ▽日次の診療と顔の成長変化（新藤勝之）
 ▽硬組織における短・長期的対応適応について（鳥居秀平）
 ▽螺旋からなる身体（伊木晴彦）
 ▽北海道の冬道と歩行に関わる諸問題（伊藤真）
 ▽骨折における立位歩行の重要性～骨折症例を通しての考察～（日本構造医学研究所）